

■ 画竜点睛の日

館長 大城将保

辰年にちなんで龍にまつわる話題が多いが、足元にも一つ伝説が生まれていた。

県立博物館の正面ロビーに鎮座している龍が夜なよな館を抜け出して竜潭の水を飲み、首里城の子どもたちに逢いに行くという。ただし深夜のことだから誰ひとり目撃したものはないという。

荒唐無稽だと叱られそうだが、もともと龍そのものが架空の存在だから目くじら立てる理由もない。フィクションが人間の心をうごかすエネルギーをおびてきたとき芸術となり文化となるのだ。

龍は政治をも動かす。ヨーロッパでは聖ジョージのドラゴン退治の彫刻や絵画がいたるところで見られる。西洋のドラゴンは破壊と悪魔の象徴だが、東洋では聖なる存在になる。中国の神話では人間の祖となる男女が人頭龍身の姿でこの世界をささえているという。龍

の姿体はラクダや鹿や蛇など9種の獣を複合したものだといわれるが、長江に棲息するワニがモデルになったという説もある。龍は水神を意味し治水の靈力を保持し、水を治める者が天下を治めるといふ政治思想から中国皇帝のシンボルとなる。やがて冊封を受ける琉球にも渡ってきた。ただし、皇帝の龍は5つの爪をもつが冊封諸国ではへりくだって4爪になる。わが館の龍もよく見ると爪は4本である。

琉球にも龍が政治を動かした実例がある。尚敬王の代、羽地川に運河をと

おし王府を国頭に移そうとする論がもちあがった。蔡温は、これに風水論をもって反論した。沖縄島は首里を中心に龍の形をしている。これを変更すれば龍脈が断たれ国勢が衰えるというのである。この理論を碑に刻んだのが名護ヒンプンガジュマル下の「三府龍脈碑」である。

中国の故事に「画竜点睛」というのがある。さる大画家がさる寺院の壁に龍の絵をかけたが、わざと瞳(睛)の部分空白にした。わけをきくと瞳をいれると勢いあまって天に飛び去るといふ。実際に一筆いれてみるとその通りになった。これから「画竜点睛を欠く」という諺が生じた。

実はわが館も点睛を欠いた画龍を一つかかえている。館長室に飾ってある新館の基本設計図だ。当初の計画では今年が落成の予定であったが、県の財政難で凍結状態だ。

点睛の日を一日千秋の思いで待望しているのは私ばかりではあるまい。



■ 第24回 移動博物館 in 上野村

沖縄県立博物館では、24回目の移動博物館を上野村営体育館において、平成11年11月19～21日の3日間開催しました。展示内容は自然史、考古、歴史、美術工芸、民俗の5分野からなり、高さ5mのサウロロフス骨格標本をはじめ、総展示数は413点に上りました。開催中に文化講座を上野村環境改善センターにおいて大城 慧(県立博物館学芸課長)が、「遺跡からみた上野村」という演題で実施しました。また、「自然観察会」を嵩原建二(県立博物館学芸員)の指導で、地元の小学生や父母を対象に実施し、野鳥や上野村周辺の自然を観察しながら、学習しました。期間中6,542人の入場者があり、盛況のうちに閉会いたしました。



企画展「工芸王国—きらめく手わざの世界を沖縄から」

この企画展は「沖縄県無形文化財保存伝承事業」の一環として、当館及び文化課の共同事業として平成12年2月8日から27日まで行なわれたものです。展示室には芭蕉布、紅型、本場首里の織物、読谷山花織、漆器など国や県、市町村指定の無形文化財保持者の作品とその伝承者の作品、合わせて58点が集まりました。また、解説・写真パネルなどを用いて工程や保存会を紹介し、「手わざ」の確かさと素晴らしさを披露しました。関連して行なわれた特別講演及びシンポジウムでは、講師やパネリストに加え参加者からも工芸に対する熱い思いが語られ盛況でした。



11年度の博物館シアター「道」の上映と講演会



博物館シアターでは、平成11年12月19日(日)に「なつかしの名作」シリーズで、名作映画の中から、1957年キネマ旬報ベスト10 1位/1956アカデミー賞外国語映画賞を受賞した、1956年製作の「道」を上映しました。また、上映の前に、安谷屋 真理子(FM沖縄放送部次長)さんを講師に招き、上映会の前に映画「道」にまつわるお話しをしていただき、好評のうちに第47回博物館シアターを終了しました。

11年度の子ども

体験学習教室

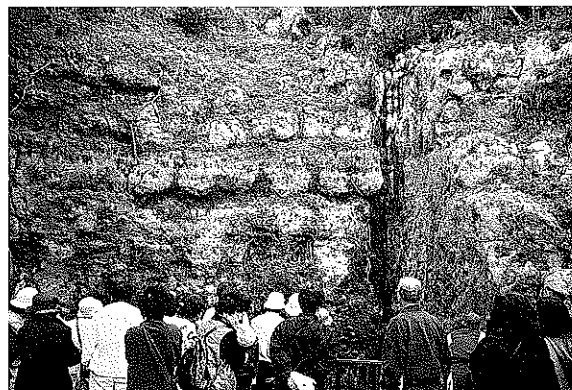
本年度最後の子ども体験学習教室「おじいちゃんとアンツクをつくらう」を去った12月26日から2月26日の期間で実施しました。アンツクは八重山諸島でつくられているアダンの気根で縄をつかった編み籠のことで、弁当入れとしてよく使われていました。宮古諸島ではアンディラと呼ばれ、袋状になった編み籠で



芋等を運ぶ時の背負い籠として使われていました。自分で縄から作る参加者や、ボランティアの人たちに教えてもらいながら、熱心につくる子どもたちなど、皆楽しそうにアンツクづくりを行ないました。

11年度の文化講座

11年度の文化講座は3月の「アジアの美術館事情」で終了しました。12月に行われた「南部の遺跡めぐり」では、山下町第1洞窟や、港川フィッシャー遺跡などを見学しました。1月の「野鳥観察会」では雨天にも関わらず受講生たちは、熱心に講師の話しに耳を傾け、望遠鏡と図鑑を見比べていました。2月の「歴史の道を歩く」では講演と歩く・見るという2回形式で行ないました。1月の講座と同様にあいにくの雨天での決行でしたが、実際に歩いてみるといういろいろな発見があり、講演だけでは分からなかったものがありました。



2000年度 事業案内



■ サミット特別展「大琉球展」

平成12年度に沖縄県で開催されるサミット開催記念事業として、平成12年7月11日から8月27日まで、特別展「大琉球展」を開催します。展示は、沖縄の自然・歴史・美術工芸・民俗の各分野を総合的に紹介するとともに、琉球王朝文化の神髄である尚家関連文化遺産や、沖縄の人間国宝等、沖縄独自の歴史と文化を強調した展示にしたいと考えております。

また、特別展開催中に、講演会も予定しております。

■ 平成11年度新収蔵品展

新収蔵品展は、前年度の4月から3月までの1年間に博物館に寄贈された資料や購入、収集した資料を公開するものです。平成12年度は、9月12日から10月22日の期間開催します。

毎年多くの方から寄贈されます。これら資料は、寄贈手続きをすませ、寸法を計り、写真を撮ります。資料1点につき、一枚のカードが作成され、いろいろな事柄(情報)を抽出し、書き込まれ、収蔵庫に保管されます。この後、博物館資料は、展示や調査研究等に活用されていきます。

● 特別展「日系移民1世紀」展

ハワイ移民百周年を記念し、11月10日から12月10日まで開催します。展示は2部構成になっており、第1部は全米日系人博物館の巡回展「From Bento to Mixed Plate (弁当からミックスプレートまで)」の資料で、ハワイの初期移民から現在までの日系人移民を概観する展示を歴史展示室を中心に行ないます。また第2部では、ハワイ・北米・南米・南洋諸島へ「移民」したウチナーンチュをテーマにした展示構成を検討しています。ここでは企画展示室、美術工芸室を使用して、「沖縄移民」の歴史的・社会的背景などを学び、「移民」の追体験をしていただければと思います。それぞれの移民地で花咲く「もうひとつの沖縄社会や文化」を再確認する機会になればと願っています。乞うご期待を！

■ 企画展「沖縄の繊維・染料植物展」

人々は天然素材の中から、様々な繊維や色素を見だし利用してきました。とりわけ染料植物は身近な植物の中から、好適な染色素材として見いだされてきました。こうした染料植物は世界で1000種以上にのぼるとされています。

本展示会は2月6日から3月4日まで開催し、苧麻やイトバショウなどの沖縄の繊維植物を紹介するとともに、藍やフクギなど県内各地でもふつうに見られ、熱帯・亜熱帯地域で利用されている染料植物と、その色合いの豊かさとその素材を生かした沖縄の染色の世界を紹介します。

関連催事として、1・2月の文化講座を自然と染色の二分野から講演してもらう予定になっております。

■ 文化講座300回記念講演

1974年(昭和49)から始まった文化講座は、2000年(平成12)で26年目を迎えます。2000年度の第1回目の文化講座は300回目となり、特別に記念講演会を行ないます。

記念講演会は、比嘉 政夫先生(国立歴史民俗博物館民俗研究部長)を講師に迎え、「アジアの民俗と沖縄」という演題で講演してもらいます。アジアの中の沖縄を再発見することで、沖縄の歴史や文化に対し理解を深めていただきたいと思います。

日 時:2000年5月14日(日曜日)

14:00~17:00

場 所:博物館講堂



第200回記念文化講座「稲作起源と伝来」1991年4月20日
佐々木 高明(国立民族学博物館教授) 首里公民館大ホール

2000年度 事業案内



子ども体験学習教室

子ども体験学習教室は本年度で8年目になります。今年度も以下の4つの講座を計画しています。

- (1) 「豆とサトウキビづくり」
4/22・5/27・7/8、29・10/21・2/10
- (2) 「鍾乳洞を探検しよう」
6/10、24・8/20
- (3) 「漆喰シーサーをつくろう」
7/22、23・8/5、6
- (4) 「紅型をつくろう」
11/11、25・12/9

「豆とサトウキビづくり」は1年間で6回の活動を予定しています。また、「親しむ博物館づくり」の一環として学校等におけるアウトリーチ活動の実践的活動として「堅穴式住居」を活用した体験活動学習プログラムを複数の学校と提携して実施していく予定です。

ボランティア養成講座

博物館がボランティア養成講座を開始して7年目を迎えます。現在78名の登録ボランティアが活動しています。来館者への解説案内・学校団体見学の解説補助・子ども体験補助・資料整理班・通訳班・点訳班・テープ起こし・音訳サービスなどいろいろあります。これまでの博物館のイメージとして“物を見せるだけの博物館”との返事が多いと思いますが、今や県民に開かれた博物館、参加型の博物館を目指しています。そのためにはボランティアの参加応援が必要であります。毎年6月に募集をして、講座を終了すると登録してもらいます。昨年度は40名の募集に90名以上の応募がありうれしい悲鳴をあげています。

12年度の養成講座は6月から8月まで毎週水曜日、講師は博物館の学芸員、詳しくは5月の新聞紙上をご覧ください。

生涯学習が叫ばれて久しくなりますが、今や実感という方も多いことと思います。表には見えないボランティア活動、貴方も参加してみませんか。

博物館シアター

平成12年度は、第2弾「映像で見る沖縄」と、「なつかしの名作」を企画しました。

- シリーズ映像でみる沖縄Ⅱ「OKINAWA 物語」—
7/30 48回「遙かなる甲子園」1990年製作
(日)
8/6 49回「うみ・そら・さんごのいっつたえ」
(日) 1991年製作
—シリーズ「なつかしの名作」—
12/10 50回「ひまわり」1970年製作(イタリア)
(日)

博物館文化講座

平成12年度の文化講座も、300回の記念講演会をはじめ、様々な講演会を企画しております。

- 5/14 300回「アジアの民俗と沖縄」
(日) 比嘉政夫(国立歴史民俗博物館民俗研究部長)
6/11 301回「沖縄戦のまなび方」
(日) 大城将保(沖縄平和ネットワーク代表)
7/22 302回「グスク・英雄・墓めぐり—本島中部地域—」
(土) 嵩元政秀(沖縄考古学会会長)
8/19 303回「歴史散歩みち—東御廻り(ガリウマイ)—」
(土) 大城秀子(知念村教育委員会社会教育課主査)
9/16 304回「収蔵品解説会—陶器—」
(土) 津波古聡(県立博物館学芸員)
10/21 305回「尚家文書が語る世界」
(土) 田名真之(那覇市経済文化財部歴史資料室長)
11/18 306回「沖縄の移民」
(土) 石川友紀(琉球大学教授)
12/9 307回「沖縄人(オキナワ人)の来た道」
(土) 土肥直美(琉球大学助教授)
1/20 308回「植物資源としての繊維・染料植物」
(土) 花城良廣(海洋博記念公園亜熱帯都市緑化植物園長)
2/17 309回「繊維からみる—染料植物—」
(土) 新垣幸子(県指定無形文化財「八重山上布」保持者)
3/10 310回「北部の野鳥観察会」
(土) 髙原建二(県立博物館学芸員)

【交通案内】

那覇空港発

125番(知花線)「桃原」バス停下車、徒歩10分
13番(石嶺空港線)「当蔵」バス停下車、徒歩3分

市内バス

1番(首里識名線)・12番(末吉線)・14番(泊線)・
17番(石嶺間南線)の「首里城公園入口」、
または「当蔵」バス停下車、徒歩10分

9番(小嶺石嶺線)の「桃原」バス停下車、徒歩10分

市外バス

97番(琉大線)「桃原」バス停下車、徒歩10分
46番(糸満西崎線)の「首里城公園入口」、または
「当蔵」バス停下車、徒歩3分

沖縄県立博物館だより No.43

発行年月日：平成12年3月

編集・発行：沖縄県立博物館

住所：〒903-0823

那覇市首里大町1-1

TEL 098-884-2243

FAX 098-886-4353

ホームページ [http://museum.mm.pref.](http://museum.mm.pref.okinawa.jp/index.html)

[okinawa.jp/index.html](http://museum.mm.pref.okinawa.jp/index.html)

